

(12) 水戸八景

水戸八景は、天保年間（1830～1844）、水戸藩第9代藩主徳川斉昭が、領内の景勝地8か所を選定したものである。この目的は、藩士の子弟達が風月を觀賞し、八景を巡ることにより心身の鍛練を目指したものとされる。心身の鍛練では、水戸城下を夜明け前に出て那珂川を渡り、先ず鹿島香取神社の境内にあった「青柳夜雨」（水戸市青柳町）を訪れ、次いで「太田落雁」・「山寺晩鐘」（常陸太田市）を巡り、そこから「村松晴嵐」（東海村）、そして那珂川河口の「水門帰帆」（ひたちなか市）、その対岸の「巖船夕照」（大洗町）、さらに涸沼湖畔の「広浦秋月」（茨城町）、そして最後に千波湖湖畔の「僊湖莫雪」（水戸市）となる。このうち那珂川の景勝地に関するものが、上流から青柳夜雨・支川桜川沿いの僊湖莫雪・巖船夕照・水門帰帆・支流涸沼川沿いの広浦秋月の5か所である。斉昭は八景に隷書体で自筆の碑を建てている。なお、水戸八景は中国湖南省洞庭湖南部の瀟湘八景や近江八景に倣って選定したともいわれる。



図 5-17 那珂川流域における水戸八景の位置図

① 青柳夜雨（水戸市）

水戸城下から那珂川を渡って棚倉（福島県）方面に至る棚倉街道（349号線）の青柳の渡しのあった場所は、昔は人馬の往来の多いところであった。昔は川岸に柳が沢山植えられており、とても風情があったという。

雨がしとしとと降る夜に対岸の水戸の城下を見ると、枝垂れ柳の間から細長い台地の上に、雨に煙って灯りが点々と見える様子が素晴らしかったものと思われる。

現在、碑石は青柳町（水戸市）の鹿島香取神社南側の堤防下にある大きな柳の木の脇に建っている。



（平成17年4月）

図5-18 青柳夜雨の碑



（平成17年4月）

図5-19 青柳夜雨の碑と柳の木

② 僊湖莫雪（水戸市）

水戸市内にある借楽園の南崖斜面の中腹に僊湖莫雪の碑石は建っている。

僊湖は、千波湖の意味である。昔の千波湖は下市の西部から桜山下まで東西にのびた大きな沼であったが、4分の3が干拓され、現在のように小さくなった。

莫雪は暮れ方に降る雪を指している。千波湖の湖畔に暮れ方に降る雪は、千波湖を除いて辺り一面が銀世界になり、そこに夕闇がせまる光景は、たたずむ人に寂寥感と一幅の墨絵を^{すみえ}見てるような感慨を与えたためではないだろうか。



（平成18年2月）

図5-20 僊湖莫雪の碑

③ 巖船夕照 (大洗町)

大洗町磯浜町の岩船山願入寺いわふねさんがんにゅうじの裏手西側にある。那珂川右岸南西から流入する支流涸沼川との合流点を眼下に見下ろす台地の斜面に巖船夕照いわふねのゆうしょうの碑石は建っている。眼下には那珂川、涸沼川の流れによってつくられた平野が広がり、東方には海門橋、西方の遙か彼方には霊峰筑波山・加波山れいほうつくばさん かばやまを望み、その夕映えのすばらしさは一幅の絵を思わせたものと思われる。



(平成 16 年 6 月)

図 5-21 巖船夕照の碑



(平成 16 年 6 月)

図 5-22 「巖船夕照」から海門橋を望む

④ 水門帰帆 (ひたちなか市)

水門帰帆みなとのきはんの碑はひたちなか市役所那珂湊総合支所の南側にある。碑石は昔、鹿島灘に面した断崖の上に建てられていたが、都市計画の関係で現在の場所に移動された。

「水門」は「みなと」を、「帰帆」は「帰路につく帆掛け船」を意味している。夕暮れ近い頃、漁を終えた漁船が港を目指して帰る様子が何ともいえぬ寂寥感を感じさせたのだろうか。

ここには2基の副碑があり、1つは明治24年(1891)1月の改修記念碑、もう一つは昭和13年に深作氏が藤田東湖の詩を刻み建てたものである。



(平成 18 年 2 月)

図 5-23 水門帰帆の碑

⑤ 広浦秋月 (茨城町)

茨城町下石崎しもいしがきの長洲公民館南部の涸沼の出口に伸びた砂州上に広浦秋月ひろらのあきのつきの碑石がある。ここ広浦は砂州が広がり、昔は下り松、上り松、傘松、臥龍松などの名松、老松があったが、近年は松食い虫により枯死するものが多く、松は少なくなった。

秋の冴えわたる名月が、さざ波に揺れる水面に映っている様子が想像され、幻想的で心にしみるものがある。斉昭は和歌で「大空のかげをうつして広浦のなみ間をわたる月ぞさやけき」と詠んでいる。

碑石の直ぐ脇には副碑の「保勝碑」がある。この保勝碑には寒水石が用いられ、水戸八景の選定経過が書かれている。



(平成 16 年 6 月)

図 5-24 広浦秋月の碑